教育実習生を支援して 44 年

―坂本信昭先生に聞く―

聞き手：『駒澤大学教育学研究論集』編集委員

坂本信昭先生は、44 年の長きにわたって「教育実習」を中心に教職課程を支えてこられましたが、今年度で定年退職されます。先生は教職課程部門でただ一人本学の出身で、僧職者でもあります。後任にはそうした背景を持たない方が予定されており、教職課程部門は、少なくとも今後しばらくは、駒澤の精神や文化と深く切り結んだ人間形成を経た教員を持たずに活動することになります。そこで、坂本先生という存在がおられたということの意味を残される私たちが考えてみられるよう、先生からお話を伺うことにしました。

先生は、岡山で住職をしている父の後を継いで中学か高校の教員になりたいと思っていた自分がどうして大学にいるのだろうかと、自分でも運命の不思議を感じておられたようで、この度のお話の内容も、そうした経緯を中心としたものになっています。なぜ教員になろうとしたのか、なぜ教育実習生の事前事後指導にエネルギーを注ぐことになったのか、というお話です。そして、そこには、仏教的精神と繋がる一貫したテーマがあったように見受けられます。

――ご生家は岡山のお寺と伺っておりますが。

坂本　曹洞宗本山総持寺の直末で応永 6 年（1339 年）に創建された瑞景寺というお寺で、標高 500 メートル程の山の上にありました。真庭郡落合町（現・

真庭市）にありますが、かつては津山藩初代藩主森忠正（森蘭丸の弟）の庇護を受け、裕福な寺でした。山林は三十町歩程あります。かつては寺田もたくさんありました。檀家の戸数が少なくてもやっていけましたので、末寺それぞれに檀家を配分し、瑞景寺の檀家は57軒しかありません。ですから、今では寺院経営が大変です。

父は農家の出で、８歳で出家し僧侶になりました。母は比較的裕福な農家の生まれで、とても優しい人でした。母はおいしいものは自分では口にせず、私に食べさせたり、檀家さんにあげてしまうような人でした。父は身心堅固で104歳でなくなりましたが、読経の声は素晴らしかったです。明治生れの気質からか、戒名を、物の値段のように「いくらですか」と尋ねたりする人にはきびしく批判をし、教示しました。昭和15年に、私は三男として生まれましたが、未熟児で、産婆さんが「大きくならないのでは」と心配したとのことです。中国山地の山の上でしたが、幸いにも、ヤギの乳や、本堂の軒下に毎年巣を作るスズメバチの子、マムシなど、栄養価の高いものを与えられて生きながらえることができたようです。

普段はめったに人にも逢わない山中でしたので、小学校入学までの幼時期には遊び友達もなく、タヌキやカブトムシを友として暮らしました。年２回（お盆と正月）檀信徒がお参りに来るのが楽しみで、自分の存在に注目してもらおうと、寺の後ろの大木の枝先まで登って木を揺らしたりしていました。万一落ちたら大けがをするので、皆がとても心配しました。

――河内小学校を卒業して昭和28年には有隣中学に入られます。

坂本　中学までの道程が５キロほどあり、通学用に父が新しい自転車を買ってくれました。当時自転車は一家に一台あるか無いかの貴重品で、大事にするのが当たり前でしたが、私は田んぼの畦を走るなど、荒っぽい乗り方をしていました。他人を攻撃するということはないのですが、自分の身に危険な行為を常にやるようなところがありました。人の関心を引きたかったからでしょう。もちろん、それが危険な行動とその時点では気づいてはいませんで

したが。そのような気付きをもたらしてくれた出来事が中学時代に生じます。そして、それが私の人間形成の上で大きな転機となりました。

――それはどのような出来事でしたか。

坂本　中学卒業を間近に控えたある日、担任の先生から呼ばれました。その先生は 2 年次から持ち上がりの担任でしたが、大学を出て間もない若いスマートな先生でした。思い起こせば、私と先生の他に誰もいませんでしたので、話をしたのは職員室ではなく、個室のようなところだったと思います。その時、先生は、神妙な顔で、「先生は坂本のことが心配なんだ」と言われました。私には、先生のその様子や発言はまったく不可解であり、いったい何を言っているのだろうか、とすぐには理解しがたいものでした。

しばらく沈黙が続いた後、「先生は、坂本が無事に大人に成長するだろうか、いや大人になるまでに大怪我をするか、もしかしたら死に至るような事故にあう、そのようなことがあるかもしれないと坂本を見ていると心配なんだ！」と言われ、さらに、「おそらくご両親も心配されていると思うよ」と言われたのです。その言葉に、それまで感じていた強い違和感がスーと消え、先生が真剣に心配してくれていると実感したのです。先生の「大怪我をするか、死に至るような事故にあう」という言葉には自分でも思い当たることがあったからです。高い木の枝に登って木を揺すっていた子ども時代や、自転車で暴走するような自分の危なっかしい行動を振り返れば、両親は言葉には出さないまでも、きっと心配しているだろうことは、容易に推測できることでした。

――中学卒業後、静岡で修行しながら夜間高校に通うという選択をされましたが、中学の先生との出来事がそうさせたのですか。

坂本　もともと地元の高校に行くつもりだったのですが、あの面接の後、自分でも「このままではいけない」と思うようになりました。そして、以前に見た『宗報』（曹洞宗発行の年報）に「専門僧堂安居者募集」があり、しかも「中学卒業生の安居者には夜間高校通学の便を与える」とあったのを思い出

したのです。それで、静岡県袋井市の「専門僧堂可睡斎」に安居したいと父に申し出ました。担任の先生とのいきさつには触れませんでした。

地元の高校に行くものだと思っていた父は驚いて、何でそんなことを言うのかと問い質されましたが、ともあれ、父に連れられて可睡斎専門僧堂の門を叩いたのです。

「可睡斎」という名称は、今川義元の人質だった竹千代（後の徳川家康）を助け出した功績から家康の前でも居眠りをすることさえ許された（「和尚、我をみること愛児の如し。眠る可し、眠る可し」と家臣の注意を家康が窘めた）という東禅寺の住職にちなむものです。東禅寺は、浜松城主となった家康から10万石の領地を与えられ、寺名を「可睡斎」と改めました。私が安居した時には、30人ほどの修行者を抱える総勢50名ほどの専門僧堂でした。

――そこでの生活の様子はどのようなものでしたか？

坂本　父が帰った後、雲水の出立ちをした私は、一人受付に向かいました。受け付けてもらえるまで、5，6時間ほど待たされました。さすがに寂しく、つらい思いをしましたが、「何しに来た？」「私はこちらに安居のために上参しました」という遣り取りを経て、新参雲水が過ごす「旦過寮」での生活が始まりました。そこでは、就寝と食事とトイレの時間以外は床の間に向かって坐禅をします。監督に当たる先輩雲水達が時々様子を見に来ます。姿勢が崩れていると警策でピシッと叩かれるのですが、その感じが人によっていろいろでした。仏の手のように感じられることもあったし、憎しみがこもっているように感じることもありました。５日間そこで過ごした後、本格的に修行が始まりました。朝４～５時に起床、２～３時間坐禅、１時間半～２時間朝のお勤め（お経を読む）、1時間余作務（境内、内外の掃除など、素足で）、その後朝食としておかゆを作法に則って頂きます。その後老師の講話、昼のお勤め、昼食となりますが、昼食は麦ごはんと沢庵です。午後には洗濯などの私的な時間があり、夜のお勤め、夕食となります。私は、５時から夜間高校がありますが、他の修行者は、夜坐（夜の坐禅と老師の講話）や入浴をし

ます。就寝は９時です。また、12 月１日～８日は蝋八摂心といって早朝から坐禅をします。12 月８日の明けの明星とともにお釈迦様が悟りを開いたという故事に由来する修行です。また、寒中水行といって、２～３センチほどに張った水行池の氷を割って水を汲み、それを浴びました。そうした専門僧堂の生活を３年間したわけです。

――ご自分にとってのその修行の意味をどのように考えておられますか？

坂本　老師の講話や夜間高校の先生の話、大人の話を素直に聞くようになりましたね。そして、それまでの自分を振り返り、このままの自分ではいけない、自分はどうあるべきかと真剣に考え続けました。

曹洞宗立宗の精神に引きつけて言うなら、本当の自分をとらえるとは、人がこの世に生まれてきた意義を掴むことです。どんな人でもこの世に生れて来た意義をもって生れて来た、他の人が代わることのできない、その人でなければならない何かをもって生れて来たのです。その与えられたものが何かは人それぞれに異なるが、それを掴むことが本当の自己を捉えるということです。大乗的仏教の精神である自己を磨き人のために尽くすということも、こうした本当の自己を捉えることによって初めて可能になります。というよりも、自分を磨き、人のために尽くすことを通して本当に自己が捉えられるのであって、従って、本当の自己は生涯かけて学びとるものだと言うべきでしょう。このような真の人間形成を目指すということが本学のいわゆる「建学の精神」でもあります。

もちろん、高校生の時期ですので、こうした言葉で理解していたわけではありませんが、振り返ってみれば、この３年間の僧堂生活は、自分のその後の生き方を方向づける上で非常に大きな意味を持ちました。

――可睡斎での安居を終了された後、東京に出てこられました。夜間高校はどうなさいましたか？

坂本　夜間高校は４年間ですので、あと１年残っていました。当時の可睡斎

専門僧堂々長は、曹洞宗管長であられた高階龍仙禅師ですが、禅師の一番弟子であり僧堂の要職（副寺）にあった佐瀬老師という人に「これからどうするか」と尋ねられました。私が答えあぐねていると、「東京に行こうか」と言われました。佐瀬老師に伴われて私は初めて東京に出て来ました。そして、佐瀬老師の勧めで、千代田区にある都立九段高校の授業を参観しに行きました。そこで行われていた授業は静岡の夜間高校のものと大きく異なるもので、まさにカルチャーショックでした。とてもついていけません。静岡に帰りたいと思ったのですが、駒澤大学の付属高校の校長が佐瀬老師と大学の同期だということで、そこに頼んでみようということになりました。

佐瀬老師が校長と話されている間、私は教務主任と面接をしました。そして、教務主任から、「３年編入を許可しよう」と言われました。九段高校での経験があったので、自分では１年編入をお願するつもりでしたが、そう言われて咄嗟に、「２年にお願いできませんか」という言葉が出てしまいました。そして、２年編入となったのです。

その頃の思い出と言えば、渋谷あたりの食堂に初めて入って佐瀬老師から何でも好きなものを注文するようにと言われて、困ってしまったこともありました。可睡斎ではお粥でしたので、スプーンで食べられるカレーライスを注文しましたが、食が細くなっていて、全部はとても食べられませんでした。

――大学ではどのような勉強をされましたか？

坂本　可睡斎での安居中に今後自分はどうあるべきかを十分考えました。両親にも匹敵する愛情をもって心配してくれたあの中学の担任の先生のように、教員を目指したいと思いました。３年間の安居を通じて仏の教えを学んできたので、大学では、仏教学ではなく、広く社会について学びたいと思い、社会学を専攻しました。そして、卒業後は岡山県の教員採用試験を受けて教員になり、寺の務めもしようと思っていました。

とはいえ、初めの３年間は学費を稼ぐためのアルバイトに明け暮れました。静岡では安居しながらの通学でしたし、夜間高校は学費も安かったのですが、

付属高校に移ってからの東京の生活にはお金が掛かりました。実家の寺は確かに歴史的にも由緒ある寺（作州初開の道場、つまり、美作地方で坐禅堂など修行のできる建物等が整った最初の寺院。本堂正面玄関の家紋は「菊の花＝皇室」であり、開山堂の位牌棚には徳川家康の位牌が安置されている。いんげん豆の名前の由来で知られている隠元禅師は瑞景寺に逗留した後、宇治に黄檗山万福寺を建立、禅宗の一派黄檗宗の宗祖となった。）でしたが、けっして豊かではなく、母が炭焼きなどをして学費を捻出してくれていました。大学ではそうした苦労をさせたくなかったのです。そのため授業にはほとんど出席できませんでしたが、真面目にノートを取っている友だちに助けられて何とか３年まで進級しました。（その友達とは、非常勤で新潟の佐渡から来ている藤木先生です。成績発表の度に「成績表」を見せるように言われるので、少々つらいところもありましたが。）

ところが、３年次の秋（11 月）になって、卒業論文について届けを出すことが求められました。私はうかつにも、大学とは学問研究の府、真理探究の場であるということをそれまで忘れていたのです。そこで、４年生で、つまり卒論の作成を通じて、３年間の不勉強を取り戻そうと考えました。

――そこでまた新たな出会いがあるのですね。卒論のテーマに何を選ばれましたか？

坂本　論題の申請と指導教官を選ばねばなりませんでした。私は昭和 40 年に大学を卒業しましたが、その前年には東京オリンピックがありました。それを契機にテレビが日本人の生活の中に浸透していきました。そこで、卒業論文の論題を「青少年の人間形成におけるテレビの影響」とすることにしました。これなら、生きた学問になるだろうと思ったのです。

次に指導教官の選択ですが、当時教職課程には輝かしい経歴をもった高齢の先生方が何人かおられたのですが、若くて厳しい先生ということで、30 代の上岡先生につくことにしました。先生は関東短期大学から駒澤に来られましたが、風変わりで、お世辞にも格好の良い先生ではありませんでした。私

は４年次には、日曜ごとに、上岡先生の荻窪のお宅まで伺って、指導を受けました。資料を集めるために、愛宕山のＮＨＫの資料館にもよく行きましたが、そうした一週間ごとの勉強内容を報告し、指導を受けたのです。４年次の日曜日は一日も休んだことはありません。

ところで、この頃の私は、ぼさぼさの頭をしてジャンパーを着て、まるでホームレスのようでした。はたから見れば変人の師弟のように見えたと思いますが、実は上岡先生にはもう一人、私と正反対とも言える学生がつきました。臨済宗のお寺の長男で、経済的に豊かなのでしょう、いつも三つ揃いの背広を着ていました。私は「卒論」で、入学以来数少ない貴重な「優」をもらいました。その評価は、「完璧とは言えないが可能性を感じる内容」ということでした。

――その後上岡先生とはずっとお付き合いが続いていきます。卒業もでき、教員免許も取得されたわけですが、そのまま教員にはならなかったのですね。どうしてでしょう？

坂本　思い起こせば、当時、「大阪トヨタディーゼル」と「神戸パブリカ」から内定をもらっていました。勉強不足を自覚しており、一度社会に出て、別の経験を積んでから、教師になった方が良いと思ったからです。でも、行きませんでした。とはいえ、このままではいけないという思いは強かったのです。大学院進学はお金が無くて断念しましたが、駒澤大学の聴講生になりました。１年間でしたが、教育についての「理論」をしっかり勉強しなくては、と思ったのです。当時、都立大学から非常勤で来られていた先生もあり、都立大にも勉強に行きました。また、上岡先生の配慮で、東大図書館から本を借りたり、授業にもぐったりもしました。

そうこうしているうちに秋になり、アルバイトで貯めたお金も尽きてきました。そして、タイミング良く、栃木の私立高等学校の求人情報をもらったのです。ともかく、生活費を稼がねばなりませんでした。岡山の公立学校の教師を目指していたのですが、私立高校での経験もきっと役に立つだろう、

採用されれば３年間はそこで勤めて、高校教育の「実践」から学校教育の本質を理解できれば、と面接を受けることにしました。

――葛生高校ですね。

坂本　面接日は秋も深まった日曜日でした。葛生高校に着くと、用務員と思われる 60 代の男性が笑顔であたたかく迎えてくれました。職員室に案内され、「寒いでしょう」とその人はすぐに石炭ストーブを焚いてくれました。校長先生を待つ間、その人に自分の生育歴や専門僧堂での修行や大学生活の（３年次までは、授業にほとんど出席せず、アルバイトに明け暮れた）ことなどを気安く話していたのですが、ストーブで十分暖まり、30 分ほど経った時、さすがに東京への帰りの時間も気になりました。そこで、その用務員さんに、「校長先生を呼んでいただけませんか」と言ったのです。返って来た「私が校長です」という言葉に、私は頭が真っ白になりました。

当然採用を断られると思ったのですが、「坂本君、良かったら本校に来てくれませんか」と言われました。さすがに「はい」とは言えず、「東京に帰って２、３日考えてからご返事してもいいですか」と答えました。校長は「それでいいですよ」と言われました。その言葉を聞いて、私は逃げるようにしてその場を去ったのです。とはいえ、背に腹は代えられません。翌日には、「お受けします」と電話をしました。

――初めての教員生活ですね。それも 1 年間ですが、どのような経験をされましたか？

坂本　担当したのは、「倫理社会」と「世界史」です。　その年、葛生高校は創立 60 周年を迎えていました。当時は、生徒が登下校時に通る校門は男女一緒で一見共学風でしたが、実は男女別学で、部活も、職員室も男女別でした。現在では、名実ともに共学になっています。

「教育実習」は駒沢学園女子高等学校で「倫理社会」でやりました。教育実習の経験から教材研究の大切さは身にしみていたのですが、新任の学校生

活の中で、なかなか十分に準備ができません。私は、そこで、生徒と一緒に教材研究をし、一緒に授業をつくろうというふうに考えるようになりました。一人ひとり、あるいはグループごとに課題を与えて発表させ、相互に教え合い・学び合えるようにしたのです。その結果、クラスの平均点が 80 点代にもなり、校長を喜ばせました。

――校長先生には期待されていたようですね。

坂本　私は職員寮に入りましたが、寮には私のほかに新任が２人、全員で７名でした。期待と言えば、校長は、先輩の先生達を差し置いて私に寮長になるように言い渡されました。その理由は、すぐに分かりました。入寮してみると寮のトイレと台所が酷く汚かったのです。手洗いと台所は「可睡斎」では修行の場としてとても大切にされていました。衛生面からも常に清潔にしなくてはいけません。安居の時には、トイレも素手で洗いました。ですから、入寮して先ずそうした汚いトイレと台所を私は掃除しました。おのずから体が動いてしまうのです。それ以降、先生方もきれいに使用されるようになりました。

葛生高校では、生徒全員が何らかの部活動をすることになっており、私も剣道部の顧問を命じられました。男子が剣道部、女子が長刀部となっていました。私は剣道をした事がありませんでしたが、実技の指導は７段の師範（商店主）がされるので、顧問として見守るようにということでした。しかし、座って見ているだけの若い教師を生徒が放っておくわけがありません。一緒にやろうと誘われ、ボコボコにされました。部員は 40 名近くいて、半数が初段、２名が２段でした。

元々運動には自信があった私は、彼らに対抗できるよう、町の剣道場に放課後通うことにしました。そして、３か月後（６月）には初段を取ったのです。もちろん、教師のそうした変化は生徒たちの刺激になりました。

――そして、それが坂本先生の教育経験上、最もドラマチックな出来事へと続

いていくのですね。それには、先生の勇気ある発言も大きな役割を果たしました。

坂本　9月（二学期の初め）の職員朝礼の時でした。校長が「本日はうれしい報告があります」と切り出しました。「剣道部が全員有段者になりました」と言うのです。

実は、剣道部には、一人、小児まひの後遺症で上肢に軽い障害のある生徒がいたのです。3年生で一人だけ段をとっていません。しかし、彼は練習に遅刻することもなく、最後まで部活に励み、片づけもきちんとやる、誰もが認める模範的な部員です。その生徒のことは他の先生たちも知っていました。全員ではない、ということを皆が知っていたのです。私は、手をあげて、「全員、とおっしゃいましたか？」と校長に尋ねました。もちろん、はっきりそう言ったのを聞いていたのですが。校長は、「言いました」とだけ言い、口をグッと結びました。先生方も、坂本は何を言うか、という表情でした。「全員ではありません」と私はひるまず続けました。校長の顔は憤慨の表情で顔面真っ赤になりました。朝礼は白けた雰囲気になり、そこで打ち切られました。

私は、校長は、「一人、3年生の生徒がまだ初段を取っていないが、他の者は全員有段者となりました」と正確に言うべきだったと思います。教育者としての配慮が欠けていたと思いました。それが許せなかったのです。

当時の校長は、創設者である初代校長の長男で、世襲の「二代目校長」、それ故、教学・経営の最高責任者でした。ですから、誰も校長に逆らったりしません。ほとんどの先生が、あの3年生が初段を取れないと思うのは当たり前なのだから、「全員」で良いのではないかと思っていたのです。そして、取れるはずがないというのは坂本先生も分かるはずのことだと。

しかしその後、その3年生部員にも有段者になってもらいたいと、剣道部員皆が思うようになっていったのです。それから部員全員が心を一つにした部活動が始まりました。そして、二学期が終わろうとする 12 月には、その生徒も初段に合格したのです。このことに関して「奇跡」という表現を使いたくはありません。しかし、「奇跡」としか言いようのないことでした。特別の

技術的な指導をしたわけではなく、そうするように部員達を言葉で強く説得したわけでもありません。たとえそうしたとしてもそのような方法では決して実るわけはないのです。１年目の「部活動」でしたが、大いに学ばせてもらいました。

――校長先生はその後どう振舞われましたか？

坂本　校長は「言葉」では謝ることはしませんでした。しかし、冬休み明けに学校に出ると、プレハブの私たちの剣道場の横に、新しい建物の土台が出来ていました。やがて、その上に総ヒノキ造りの剣道場が出来上がりました。県下にもそのように立派なものはありませんでした。校長は、言葉では「間違っていた」と言わなかったけれど、その深い謝罪の気持ちをあの建物を建てることで表したかったのだと思います。そうすることが、教学と経営の責任者としての、そして何よりも教育者としての責任の取り方だと考えたに違いありません。私が新しい剣道場に座ったのは一度だけですが、深い感慨を覚えました。

――１年後に大学に戻られ、教職課程の仕事に就かれます。

坂本　秋に上岡先生が突然来られて、大学の仕事を手伝ってくれないかと言われました。葛生高校で３年頑張って岡山で教員になるというつもりでしたから、はっきり断りました。上岡先生はこの時は納得して帰られたのですが、後日またやって来られました。それを聞きつけた校長も、母校の恩師が何度も足を運んでいるのだからそうしたら、と私を説得しようとしましたが、私は上岡先生に言ったことを校長にも話し、校長は納得してくれました。しかし校長の言った「恩師」という言葉が頭に残り、思案の末１年か２年手伝って岡山に帰ろうと決断しました。

昭和 42 年に副手として大学に採用され、44 年に助手になりました。当時は、実習生の台帳作りや「教育実習」の事前準備その他、いろいろなことを研究室でやっていました。私に期待されたのはそうした仕事です。また、実

習生も多い時は 1300～1500 名近くいましたが、実習校訪問も私の仕事です。私は、1 年で 380 校も廻ったことがあります。大学の公用車（後にはレンタカー）を借りて廻りました。もちろん、実習生の授業をじっくり見る余裕はほとんどありませんでした。

こうした生活を始めて 1 年が終わる頃、上岡先生に、「もう 1 年お願いしたい」と言われました。そして、翌年にも「もう 1 年」、そしてその翌年にも「もう 1 年」と言われました。そうこうしているうちに、岡山県の教員採用試験の年齢制限を超えてしまったのです。そして、47 年には専任講師になり、授業も受け持つことになりました。

――その後「教育実習」の在り方の研究と、実習生の指導に力を入れて来られました。

坂本　大学に留まることになった理由は、教員採用試験のことだけではありません。実習生の世話をしてみて、放っておけないと思ったことも事実です。そして高校教育 1 年だけの実践経験とはいえ、自分が学んだことを後輩たちのために活かせるなら活かしたいと思ったのです。

学生自身は教材研究を十分したつもりでも、実際には不十分だということがなかなか分かりません。生徒一人ひとり皆違う、同じことを聞いても、受け取り方も皆違う、そうしたことを踏まえて準備をする必要があるのですが、学生たちは何とかなると思っています。そうした難しさや、教師としての責任やその仕事の厳粛さなどを伝えようとしてきました。そしてまた、ことに実習後には、教材研究はいくらやっても十分にはならない、という事実をもとに、授業はどうあるべきかを考えていくべきだと、伝えたかったのです。

私は社会学科の卒業で、その後も教育学の専門的な勉強をしているわけではありません。しかし幸いなことに、教員養成に関わっている他大学の先生方と共同研究をする多くの機会に恵まれ、学会発表をしたり、研究報告書をまとめる経験を持てました。その先生方とは、その後も学生向きのテキストを作ったりもしました。また、東京都教育委員会教育長の主催する「教員の

資質向上東京都連絡協議会」の委員を務めるなど、教師教育の向上に寄与する機会もありました。

それでも、私は、自分の見識をもって学生たちに何かを教えるような存在でありたいと思ったことはありません。学生は後輩であり、先輩として何かしてあげられることがあればそうしてあげたいと願ってきました。

教材研究のことでも、学生にどの程度伝わったか分かりませんし、自分の気持ちの上では、やり残したことは無いとは言えない心境です。44 年がすでに経ってしまったという実感がありません。半分の 20 年くらいの感じかな。おこがましい限りですが、敢えて言うなら、「教員を目指す後輩への支援」を使命と感じ、これで良いということのないその職務に専念してきたために、時の流れが短く感じられるのかもしれません。後輩学生の面倒をみることは、本当に私のしたい務めだったのでしょう。

――人間形成の過程でも、教職に就かれてからも、出会いに導かれて来られたようにお見受けします。

坂本　あの中学の担任の先生の言葉がなければ今の私はありません。血が繋がっていてもいなくても、この世に生を受けている人々との関わり合いを大切にしたいものです。こちらが気付かなくても、周りにはいろいろ心配し配慮してくれている人たちがいます。だから自分にできることであれば、他人のために最大限してあげるべきだ、それは自分のためでもある、この世に生を授けられた自分の勤めである、というのが、私の教育の原点です。できないこともあるが、できることは精一杯やりたいのです。

ところで、宮坂哲文（「生活指導」の分野の開拓者として著名な教育学者）は禅林教育を論究した『禅における人間形成』という本を、昭和 24 年に刊行しています。当時宮坂は駒澤大学の助教授で、それは彼の初めての著書でした。その本のタイトルで、宮坂は「人間形成」という言葉を使っていますが、彼は、従来の教育学の枠組みにとらわれることなく、禅林の教育的営みを探求しようとしたのです。

優れた学問研究には、素朴な疑問から始まり、既存のパラダイムの転換をもたらすようなものがあります。宮坂の禅林研究も、「行」を安易に学校へ導入しようとする風潮に対する疑問を発端として取り組まれ、結果的に教育学の射程を広げることになりました。とはいえ、教育研究は、本来、専門研究者の独占物ではなく、万人のものであるはずです。教育についての「智恵」を豊かにしていくということは、国民一人ひとりが自分のこととして探求すべき課題なのです。

教職課程を履修する学生のすべてが、必ずしも将来教師になるわけではありません。しかし、彼ら／彼女らが家庭を築き、親となり、「子どもをどう育てるか」、「子どもがどう育って欲しいのか」を考えつつ我が子の「教育」にかかわる時、教職課程で学んだことが活かされるような、そういう「教職課程」の教員の一人でありたいと思ってきました。

これからも思いもかけない出会があるでしょう。自然に出会う人とのかかわりを大切にしていきたいと思います。自分をしっかり持ってさえいれば、自分にとって意味のない人や邪魔になる人はいないのですから。

後記

坂本先生には、平成 22 年 11 月 10 日にお話を伺いました。2 時間のお話を編集委員がまとめ、坂本先生が加筆・訂正されました。

坂本先生は、駒大高校の生徒および駒澤大学の学生としての 7 年と 44 年の教員生活とを合わせて、51 年の長きに亘って「学校法人駒澤大学」に関わってこられました。かつて非常勤講師で来られていたある先生は、坂本先生には定年がないと思われていたようです。それくらい、本学におられることが自然だということでしょう。その自然さがどこから来ているかが、お話を伺っていくらか分かったような気がします。

坂本信昭先生の略歴

1940（昭和15）年５月４日	岡山県真庭郡落合町　瑞景寺に生まれる。
1953（昭和28）年３月	同　河内小学校卒業。
1956（昭和31）年３月	同　有隣中学校卒業。
1956（昭和31）年４月	静岡県袋井市 曹洞宗専門僧堂可睡斎に安居するとともに同県立袋井高等学校定時制（夜間部）に入学。
1959（昭和34）年３月	曹洞宗専門僧堂可睡斎を送安（修了）。
1959（昭和34）年４月	東京都渋谷区 駒澤大学高等学校２学年に編入学。
1961（昭和36）年３月	同高等学校卒業。
1961（昭和36）年４月	駒澤大学文学部社会学科に入学。
1965（昭和40）年３月	同大学卒業。
1965（昭和40）年４月	駒澤大学聴講生となる。（1966年３月まで）
1966（昭和41）年４月	栃木県私立葛生高等学校（現恭斗高等学校）教諭。（1967年３月まで）
1967（昭和42）年４月	駒澤大学文学部副手（教育学研究室）。
1969（昭和44）年４月	同　助手。
1972（昭和47）年４月	同　専任講師。
1986（昭和61）年４月	同　助教授。
1992（平成４）年４月	同　教授。

1993（平成５）年４月～1997（平成９）年３月　主任。

研究業績

「実習校設定に関する考察」『駒澤大学文学部紀要』 第 29 号　1974 年。

「実習生の指導と教育実習の意義について」『駒澤大学教育学研究論集』 第１号　駒澤大学文学部教職課程教育学研究室（現在、総合教育研究部教職

課程部門）　1977 年。
「教育実習の方法及び教育的意義についての総合的研究」(文部省科研費研究助成　総合研究Ａ　代表 小口忠彦)、1983 年。
「教職導入教育の実験的研究―私立大学の事例について―」(文部省科研費研究助成　総合研究Ａ　代表 鈴木慎一)、1984 年。
「教育実習において養成される教師の資質ならびに養成に必要な諸条件」(文部省科研費研究助成　総合研究Ａ　代表 坂元 昂)、1986 年。
「教育実習の訪問指導の研究―大学教員による実習校訪問についての調査―」『教師教育研究』第 1 号　教師教育学会、1989 年。
「教免法改正にともなう教育実習の単位増について」『駒澤大学教育学研究論集』第 6 号、1990 年。
「宮坂哲文　禅と教育を論究して」(桜井秀雄編、『曹洞宗教義法話体系　第 25 巻 現代と曹洞宗』所収)、1990 年。
「教育実習の単位増にどう対応するか―駒澤大学の場合―」『東実協会報 No.19、1991 年。
「教育実習の管理運営―訪問指導ノ学内協力体制と条件整備について―」『駒澤大学教育学研究論集』第 7 号、1991 年。
『教師教育の実践的研究―教師養成と現職研修の課題―』 ぎょうせい、1991 年（共著)。
『教育実習の研究』 ぎょうせい、1993 年（代表・共著)。
『教育実習ガイド』 宣教社、1993 年（共著)。
『教育実習 57 の質問』 学文社、1994 年（共著)。
『現代教育を考える』 昭和堂、1994 年（共著)。
「介護等体験特例法について―初年度実施状況と今後の課題―」『駒澤大学教育学研究論集』 第 15 号、1999 年。
『介護等体験ハンドブック』 大修館、1999 年（共著)。
『教育実習及び介護等体験の教育的意義と方法に関する総合的調査研究』(文部省科研費研究助成研究報告書　基盤研究Ｃ　代表 黒沢英典)、2000 年

（分担執筆）。

学会発表

「私立大学における教員養成の総合的研究―関東地区を中心として―」日本教育学会（於：九州大学）、1979 年８月。

「教育実習の条件整備に関する研究」 関私教研究大会（於：明治大学）、1986 年。

「教育実習における訪問指導教員の役割」 同、1987 年。

「実習校訪問指導のマニュアルについて」 同（於：法政大学）、1989 年。

「新教育職員免許法下におけるカリキュラム編成の諸問題」 日本教育学会（於：玉川大学）、1999 年。

「新教育職員免許法下における教育実習に関わる諸問題」日本教師教育学会（於：立正大学）、1999 年。

その他

教員の資質向上東京都連絡協議会委員（昭和 60～平成３年、平成９～12 年）

川崎市宮前区区民懇話会委員（昭和 63～平成３年）